令和６年度　学校経営方針

１　はじめに

昨年５月の感染症法上の位置付けが５類に移行して以来、３年間続いたコロナ禍の生活は一変し、社会全体がWithコロナからAfterコロナの時代に移行という認識に変わってきた。学校現場でも様々な制限が解除され、少しずつコロナ以前の教育課程を取り戻してきた感じである。

ただし、我慢を強いられたコロナ禍の３年間は、全くの停滞時期だったわけではなく、学校現場においては、GIGAスクール構想の前倒しによるタブレットPC一人一台の導入、それに伴った学習スタイルの多様化、教職員の働き方改革視点による業務改善や様々な学校行事等の見直し、さらにはPTAの組織改革など、これまでの当たり前が当たり前ではなくなったことが、令和の日本型学校教育と絡み合い、新たな可能性が生まれた。

まさに、Society 5.0社会を目指した教育活動推進へのモチベーション向上とイノベーション創造だと言えそうな流れである。

このような社会と教育界のめまぐるしい変化の中で、「Well-Being（精神的な豊かさ）」という言葉を耳にする機会も多くなり、学校が学校である所以は一体何であるかを考えさせられる場面も多くなった。

平成元年創立の本校は、他校と比べるとその歴史は浅く、卒業生も比較的若い世代に多い。しかし、地域の年配者の方々が本校に寄せる期待は大きく、惜しみない支援や協力をいただいている。地域社会から支えながら本校に通う児童の「Well-Being」の土壌は十分ではあると言えそうだが、実際の教育現場ではこれまでに直面したことのないような大きな課題を抱えている現状である。

それらは、昨年度の学校アンケートや学校評価でも明らかとなった。

（分析結果省略）

素直で人懐っこい子どもらしさの反面で、精神的な部分での弱さが垣間見られることが本校児童の特性として挙げられる。

特に、令和４年度に改訂された生徒指導提要に基づき、新規不登校児童を出さないという組織的な取組を講じてきたにも関わらず、残念ながら本校の不登校児童が増加傾向であることは、深刻な課題である。

また、発達支援を要する児童も多く見られ、その対応に苦慮する場面も数多く見られた。さらに彼らの支援はもちろんのこと、他の児童の学びの充実を図ることも課題として挙げられる。

続いて、児童を取り巻く家庭と地域に係る強みと弱みである。

（分析結果省略）

多様性が認めらえる時代到来と言われているが、児童の生活基盤でもある家庭そのものが多様化しているようであり、それが集団生活を基本とした学校生活における様々な課題と直結している傾向が感じられる。

また、学びの場は学校だけではないという認識が、少しずつ社会に浸透しているようであり、公教育に携わる私たちに、学校教育とは何を目的として進め、そこに通う児童をどのように育てていくかを問われているように思えてならない。

さらに、社会の変化は加速していくため、想定外の事態や正解の見えない課題に対応が必要となる未来に備えるという役割を学校教育が担わなければいけない。

そして、令和６年度は小中一貫教育がスタートし、９年間の一貫性と連続性のある学びを支援していく必要にも迫られている。

そこで、第２次富士市教育振興計画（R４～R13）の基本目標である「豊かな心の育成・確かな学力の向上・健やかな体づくり」を視野に入れながら、本校児童ならびに家庭・地域の実態に応じた教育課程を編成し、新たな時代を生きる人材並びに持続可能な社会の創り手を育てていきたいと考える。

２　校訓

健康でがんばる子

創立以来、普遍の校訓として継続している。健康とは心身の健康であり、人が生きていく上で最も大切にしなければいけない要素である。

しかし、児童を取り巻く環境の変化により、心身の健康が脅かされている現状も否めない。

そこでまずは、全ての幸せは、健康であることが大前提であることを再認識しなければいけない。

また、精神的に病んでいる人にうかつに「がんばれ」とは言えない難しい時代ではあるが、自分自身に「がんばれ」と声を掛けることまでをタブーとしてはいけないと思う。

そこでこの校訓のもと、「がんばっている他人」や「がんばった自分」を認めることができ、そこに喜びを感じ、他者や自己を肯定できるような心身ともに健康な児童を育てていきたいと考える。

３　めざす子ども像並びに学校教育目標

「い・わ・ま・つ」
い…いつでも自分から動く子
わ…わたしもあなたも大事にする子
ま…学びを楽しみ、表現する子
つ…つながりながら成長する子

令和４年度に９年間を見通してめざす子ども像を、地域の名前「い・わ・ま・つ」を生かして三校統一のものとした。児童や保護者・地域の方にとっても覚えやすく、学校・家庭・地域が共有できる子ども像である。

さらに４つの子ども像を各校で学校教育目標として共有することで、一人一人が輝きながら共に成長し、どの子にとっても居場所があり、居心地のよい「時間・空間・仲間」となる学びの環境構築を目指す。

４　重点目標

３年間継続してきた「人にやさしい　人がやさしい」という重点目標は、全ての児童に言葉として十分周知され、日頃、子どもが発する言葉の中にも登場していた。

ただし、学校アンケート（児童）の回答によると、それを意識して生活できた（「そう思う」）と答えられた割合が 34.5%に過ぎないという結果であった。

合言葉としては十分浸透しているが、それを実際の行動に結びつけられなかったという反省の念が感じられる。また、人にやさしさ求めるがゆえに「やさしさ依存」になったり、自分自身への「易しさ」を最優先したりする傾向も見られ、それが精神的な弱さにつながることもあった。

そこで、令和６年度の重点目標設定に当たり、児童の実態（成果・課題）から重点となりそうな資質・能力を焦点化し、挙げてみると次の通りとなった。

・自分の気持ちをコントロールする（自律）
・相手の立場や思いを理解し行動につなげる（他者理解、思いやり）
・物事に粘り強く取り組む（根気強さ）
・心を開放し、豊かに表現する（表現力）
・善悪の判断ができる（判断力）

これらを踏まえて、令和６年度は自分自身にベクトルが向くような目標にする必然性を感じた。そして、これまで築いてきた「やさしさ（優しさ）」に関しても目標としては大事な要素であると考え、継続を図る

ことで次の重点目標を掲げる。

きたえよう！　やさしさ+1

「優しさ」には負荷がかかることは少ない。人は適度な負荷が与えられなければ、成長は望めない。自分を高めていく（成長していく）ためには、適度な負荷に耐える必要があり「きたえよう」という言葉を前面に出し、その思いを込めた。

鍛える部分は、まずは“心”からである。その“心”は、「技」や「体」とも連動していく。自らが“心”を鍛えていくことにより、本当の意味での「Well-Being（精神的な豊かさ）」を得ることができるはずである。

また、「+１」の部分は、あえて言葉を定めずに、個人、クラス・学年に応じて、あるいは教育課程の時期に応じて、柔軟に目標を設定できるように考えている。

つまり重点目標に込めためざす子ども像は「やさしさ」と「精神的な強さ」をもった姿である。

また、「きたえよう！」の「きた」の部分が、学校教育目標の「い・わ・ま・つ」に続く言葉であることは偶然を装いながらの意図的な設定であることを付け加える。

（小中一貫）学校教育目標

いつでも自分から動く子
わたしもあなたも大切にする子
まなびを楽しみ、表現する子
つながりながら成長する子

重点目標

きたえよう！やさしさ＋1

５　学校経営目標

「未来を生きる子どもの“心”を育てる」

「授業づくり＝学級づくり」とし、温かな支え合う集団の中で主体的に学びを深め、「人に優しく、自らがたくましい子」が輝く魅力的な学校づくりをめざす。

AI がどんなに進化しても、人間の心を超えることはできないはずである。心があるからこそ、人が人であり続けることができる。また、その心は五感によって育まれるものである。そして育まれた心は、学習場面において脳や身体とリンクし、学習内容を補完したりさらに豊かな心として育まれたりするものである。

今後時代がどのように変化していったとしても、人の心がしっかりと育ってさえいれば、生涯に渡っての「Well-Being（精神的な豊かさ）」は保障されるものと考える。

そこで、私たちは「心の教育」を最優先しながら、教育活動を展開していくことを念頭において学校を運営していきたいと考える。

また、その心構えとして教育活動の中で最も時間を掛けている日々の授業の充実を目指すべきである。

授業を通して、相互の人間関係も豊かにしていき、学級こそが最も安心して自分を表現できる居場所となるようにすることが「心の教育」を進める上での具体的なイメージとする。

さらに、基本的な心構えとして、次の３点を掲げる。

- **どの子の中にも必ず眠っている「誇り」「意欲」を引き出し、主体的に協働的に学ぶことを楽しむ子どもを育てる。**
- **安心と自由が守られ、のびのびと自分らしさを発揮できる集団づくりと同時に、 自他ともに命を大切にする教育を推進する。**
- **挑戦し続ける教職員、危機に強く信頼される学校づくりをめざす。**

なお、これらは「自己目標シート（教諭等）」のグループ目標（上から、教科指導、教科外指導、学校運営）として意識していただくものである。

６　目標具現のための基本方針

（１）知（日々の授業）徳（道徳教育）体（運動・特活）をバランスよく育み、児童の「居場所づくり」「絆づくり」「自己決定」を促していく。

ア 知育

◎校内研修テーマ「学び合いの中で“自りつ”する子」

- 子どもファーストの視点で授業を展開し、子どもが主語となる授業を目指す。
- 心が解放され自分らしさを発揮（個別最適）でき、それを認め合う学びの集団（協働的）となる。
- 心が動く体験的な学習等の機会を意図的に設定　→五感から“心”へ
- ESD から SDGs の実現を目指す　→「けやき学習」（生活・総合）への情熱
- デジタルとアナログを適切に組み合わせた学びを推進する。

イ 徳育

◎しなやかな“心”を育てる

- 子どもを「面白い存在」と思う。→　多様性を認め、どの子も安心して学べる環境を構築
- 子どもの声に真剣に耳を傾け、傾聴の姿勢を貫く。
  → 人権意識と人権感覚の往還による適切な支援・指導
- 「できたらすてきだね。」という希望を語り、願いを引き出す。
- 「どうしたらできるようになるだろう？」という自己決定を促す。
- トラブルは子どもが成長するチャンスととらえ、本音で話し合う。

ウ 体育

◎“心”を燃やし、力を出し切る

- 心に落ちる体験を通して、価値観や生き方を不揃いに磨く。
- 共に汗を流す活動によって、他者理解と自己理解を深める。
- 自分自身の健康状態への関心を高め、よりよい生き方へつなげる。
- 命の尊さを学び、自他共に命を大切にする、自分自身の生き方を考える場を設定する。
  → 防災教育、安全教育、健康教育を意図的・計画的に実施

（２）家庭・地域・外部機関とつながったり「チーム岩北」としての協働を図ったりすることで、様々な諸課題に対して真摯に対応していく。

ア 保護者に頼られ、頼る良好な関係づくり

- 保護者の声にも真剣に耳を傾け、傾聴の姿勢を貫く。
- 子どもの姿は具体で伝え、事実だけでなくその価値付けに心がける。
- PTA 活動にも積極的に参加し、信頼関係を強くする。
- 各種サポーターへの感謝の気持ちを忘れない。

イ 地域・外部機関とつながる

- コミュニティスクールとしての学校の役割を意識する。
  → CSD との連携を図り、地域とのつながりを深める。
- SC,SSW を有効活用し、心強い味方とする。
- 児童クラブとの情報交換も行い、校内での指導・支援に役立てる。
- 発達障害を抱える児童に関して外部機関と連携し、よりよい支援を模索する。
- 岩松小、岩松中とつながり、小中一貫教育を推進する。
  → ４年間・３年間・２年間の９年間の学びを意識（つなぐ・つなげる）
- 園小のつながり、スタートカリキュラムを意識する。

ウ ユネスコスクール

- 「心の中に平和のとりでを築く」という理念を継承し、学びの４本柱を大切にする。
  - ・知ることを学ぶ　…　将来の学習ための基礎をつくる。
  - ・為すことを学ぶ　…　グローバル化する社会で機能するスキルを身に付ける。
  - ・人間として生きることを学ぶ　…　バランスのとれた情緒と身体を育む。
  - ・共に生きることを学ぶ　…　人権・民主主義・異文化理解と尊重・平和と人間関係

エ　働き方改革

- 「どの子にとっても居心地のよい学級づくりが最も有効な働き方改革」の具現をめざす。
- 協働による「Well-Being（精神的な豊かさ）」な職場環境を実現する。
  → 弱音が吐ける職員室、困ったときにはお互い様